

『蜻蛉日記』における道綱母に関係する夢

佐藤千恵

一 はじめに

夢は今も昔も人の心理を考える上で重要な位置を占めている。科学技術が今日ほど発達していなかった古代に信じていることができるのは宗教や迷信ぐらいしかない。迷信の一つでもある夢は将来を暗示させる神秘的なものとして、当時の人々の生活に欠かせないものであった。現在でも精神分析学などで研究されているほど、夢はずっと人間が大切にしてきたものだといえる。

フロイトが「文芸作品中の夢は時代の人々の夢と本質的には対応するのであって、必ずしも特例でない。」^①としていることについて西郷信綱氏は次のように述べておられる。

フロイトやユング以降の現代人は夢を、意識の底に沈んだ欲望や衝動、あるいは集団無意識のあらわれと考える。……ところが昔の私たちは、夢は人間が神々と交わる回路であり、そこにあらわれるのは他界からの信号だと考えていた。昔の人にとっては、夢はこうして神や仏という他者が人間に見させるものであった。

ここから古代の夢に対する思想は現代と異なっていることがわかる。

また、一般的に夢には上野勝之氏の論文^②にあるような「魂観念」、「予知夢」という考え方もある。前者は「ある人を夢に見たときは相手自分のことを思っているとき」に見る性格を持ち、『萬葉集』などの和歌において歌われる。後者は「記紀や女流日記、説話集に見られる、神仏の意志を知るために夢を請う誓約の夢」で、「夢の宗教的機能・神秘性、すなわち神仏の告げという側面」である。本稿に登場する夢は後者はかりだが、現代とは違う意味を持つことをここで示しておくこととする。なお、「神仏の告げ」といってもあくまで「現実を変更する可能性を内包するという観念」だったことは次章の道綱母の言動からも明白になる。

二 道綱母たちの夢

『蜻蛉日記』の中で、作者道綱母が見た夢は七つある。ただし脱文が二箇所あるので実際は五つである。そしてそれに準じて他人が見た道綱母に関する夢は二つとなっている。まずはそれらを巻・年代別にあげていくこととする。

○中巻

①天禄元（九七〇）年七月、道綱母は石山寺へ参籠する。夫の兼家が遠

のき、作者の憂いが深まった時に侍女に勧められてひっそりと行くのである。そこで見た夢は次のようなものだった。

さては夜になりぬ。御堂にてよろづ申し、泣き明かして、あかつきがたにまどろみたるに、見ゆるやう、この寺の別当とおぼしき法師、銚子に水を入れて持て来て、右のかたの膝にかくと見る。ふとおどろかされて、仏の見せたまふにこそはあらめと思ふに、ましても1のぞあはれに悲しくおぼゆる。
(傍線部筆者)

この場面は『石山寺縁起絵巻』では寺社の靈験譚として書かれている。

傳大納言道綱の母陸奥守藤原倫寧女、法興院の禪閣かれぐにならせ給ひし比、七月十日あまりの程にや。当寺にまうで、夜もすがらこの事を祈り申しけるが、しばしうちまどろみたる夢に、寺務とおぼしき僧、銚子に水を入れて、右の膝にかくると見て、ふとおどろきぬ。仏の御しるべとたのもしくおぼえけるに、八月二日殿またおはして、御物忌などとて、しばしおはす。それより又うとからぬ御仲になり給ひければ、いよく信心をいたして、常に籠りなどせられけるとなむ。

石原昭平氏は『石山寺縁起絵巻』が「信仰心の昂揚と観音の利益性を権威づけるもの」3としているが、道綱母は右の傍線部に見られるように夢告というよりも「自身の孤独性、不安な心情」を感じていることを指摘しておられる。4

ところで、ここでの問題は夢の内容である。法師が銚子の水を右膝に

注ぎかけることを密教の灌頂などと宗教的に考える説と、性的な欲望のあらわれとしてとらえる説がある。前者の灌頂とは受戒して仏門に入る時に行う儀式で、水を頭頂に注ぎかけることである。岩瀬法雲氏の論(注四)で、水をかけられるのが「膝」だったことこそ夢だからだという。「近い場所を暗示させる」として、作者の出家願望は石山詣の時点であったと考えられるのだ。柿本獎氏も「靈夢」とお考えになる。後者は岡一男氏や村井順氏らの「子宝を授かりたいという熱烈な願望」を潜在的に抱いていたとの説、「仏が見せて下さったと思うと悲しくなる」と作者が思うことから読み取れるもの⁵という意見がある。どちらがよいかはまだ議論されている。その中で後藤祥子氏は「論者の多くが、宗教儀礼的な靈夢と見ている作者の意識下に、潜在的な性願望を読み取っているというのが実際であろう」⁶と述べておられる。

今回は『新編日本古典文学全集』の木村正中氏の「わが身をいっそう切実に内観し、哀愁に満ちた彼女の人生の現実の中に位置づけていく」という心理がある点を重要視したい。

②天禄二(九七二)年四月、兼家とのことへの苦惱は深まり、作者は一日から父の家で長精進を始める。煩惱が尽きない中、二十日目に見た夢は次のようなものである。

二十日はかり行ひたる夢に、わが頭をとりおろして、額を分くと見る。悪し善しもえ知らず。七八日ばかりありて、わが腹のうちなる蛇ありきて肝を食む、これを治せむやうは、面に水なむいるべきと見る。これも善し悪しも知らねど、かく記しておくやうは、かかる身の果てを見聞かむ人、夢をも仏をも用ゐるべしや、用ゐるまじや

と、定めよとなり。

最初の部分では尼になることが書かれている。「煩惱から解脱することにより心の平静を求め、そのために仏の加護をえようとしている」も解釈できるし、現実には絶望して仏道に救いを求め、将来は出家すると暗示されているとも見える。

次の蛇の夢は明らかに性的欲求が見られるとする説があるが、これらの夢の吉凶を作者は関係ないと思っているようだ。尼になる夢を既に見ているのにそう考えるということは、そこまで仏教を信仰していないのではない。池田利夫氏は

現在勤行に励んでいる彼女が、「夢をも仏をも」と両者を一括りにして扱い、これを用いるべきか否か後の人が定めよと言いつついるのは……これ（勤行）によって平静を得ることの至難さが痛烈に見通されているようで、煩惱からの脱却は、所詮それとの対立によってのみ達成されるという意志と、一方ではそれも容易に成し遂げられそうにない絶望的な感情が交錯している。そしてその上で、現に見た夢を正確に書きとめ、自分の生涯を見届けた他人が、この夢なり信心なりの効験が果して存在するのかどうかを判断せよと言明しているのであるから、兼家の夜がれに苦しんで、ただ度を失って憤り、いたずらに悲しみに沈んでいるような女性とは異なつた、強韌な精神をそこに見出すことができよう。

と述べておられる。この夢は意志の弱さから来たものではないと思われ。前者と後者の夢には矛盾があるように見えるのだが、作者が夢解き

をしたという記述がないことから、当時としては珍しく現実的な人であつたことがうかがえる。

この考え方を重視する説が多いのだが、石山詣で夢を見た時とは異なる作者の心情に注目してみる。石山詣ではまだ仏を信仰しているが、今回は仏も夢も信じようとはしていない。この間に兼家との距離がますます開くばかりだつたためであろう。この移り変わりに重点を置くべきだと考えている。

また、①の夢も含めて注意すべきことは、柿本氏や村井氏の説「作者の意図ではなかつたにもかかわらず、読者がそのことを強く意識した」点である。夢の不可解性はここにある。

○下巻

③天禄三（九七二）年二月、道綱母は石山寺の法師に頼んで自分の代わりに見させた夢がある。

十七日、雨のどやかに降るに、方塞がりたりと思ふこともあり、世の中あはれに心細くおぼゆるほどに、石山に一昨年詣でたりしに、心細かりし夜な夜な、陀羅尼いと尊う読みつつ礼堂にをがむ法師ありき、問ひしかば、「去年から山ごもりしてはべるなり。穀断ちなり」など言ひしかば、「さらば、祈りせよ」と語らひし法師のもとより、言ひおこせたるやう、「いぬる五日の夜の夢に、御袖に月と日とを受けたまひて、月をば足の下に踏み、日をば胸にあてて抱きたまふとなむ、見てはべる。これ夢解きに問はせたまへ」と言ひたり。いとうたておどろおどろしと思ふに、疑ひそひて、をこなるこち

すれば、人にも解かせぬ時しもあれ、夢あはする者来たるに、異人の上に問はずれば、うべもなく、「いかなる人の見たるぞ」と驚きて、「みかどをわがままに、おぼしきさまのまつりごとせむものぞ」とぞ言ふ。「さればよ。これがそらあはせにはあらず。言ひおこせたる僧の疑はしきなり。あなかま。いと似げなし」とてやみぬ。

(傍線部筆者)

大変詳しい記述なので、作者にとつては重大な夢だといえる。家の繁栄の夢で、喜ばしいはずだ。右の傍線部に似た表現は『源氏物語』若菜上にもみられる。

みづから須弥の山を右の手に捧げたり、山の左右より、月日の光さやかにさし出でて世を照らす、

という明石の入道が娘の誕生の前に見た有名な夢である。須弥山は仏教での最高の山、右の手に捧げたというのは、右は女子(明石の上)を指し、月を中宮、日を東宮に譬えたものであり、神仙思想では吉となる。⁽⁹⁾『蜻蛉日記』では月が作者に生まれる女子で、将来女御・後の位にのぼり、天下を思いのままにすると夢解きに言われる。疑いをもつ道綱母も後に娘を授かるよう神仏に祈り、それがかなわないとわかると養女迎えをしている。こうした夢の原典は『過去現在因果経』にあるので引用しておく。

尔時、善慧比丘、白^{シテ}普光如来^ニ言^{ハク}。「世尊^ヨ。我於^ニ昔日^ニ、在^ニ深山^ニ中^ニ、得^テ五奇特^ヲ夢^ヲ。一者夢臥^ニ大海^ニ。二者夢枕^ニ須弥^ニ。三者

夢海中一切衆生入^ニ我身^ニ内^ニ。四者夢手執^レ日者夢。五者夢手執^レ月。唯願^{ハク}世尊^ヨ、為^レ我解^ニ說^{セヨ}此夢之相^ヲ。」尔時普光如来、答^{ハク}言^{ハク}。「善哉。汝若欲^キ知^{ラド}此夢義^ヲ、当^ニ為^レ汝說^ニ。夢臥^ニ大海^ニ者、汝身即時在^ニ於生死大海^ニ中^ニ。夢枕^ニ須弥^ニ者、出^ニ於生死^ニ得^ル一般涅槃^ニ相^ヲ。夢大海中一切衆生入^ニ身^ニ内^ニ者、当^ニ於^ニ生死大海^ニ為^レ諸衆生^ニ作中^ニ。歸依^上處^上。夢手執^レ日者、智慧光明、普照^ニ法界^ニ。夢手執^レ月者、以^ニ方便智^ニ入^ニ於生死^ニ、以^ニ清涼法^ニ化^ニ導衆生^ニ、令^レ離^レ惱熱^ニ。此夢因縁^ハ是汝将来成仏之相^{ナリ}。善慧聞^{キテ}已^テ、歡喜踊躍、不^レ能^ニ自勝^ニ。礼^レ仏而退^リ。」

(傍線部筆者)

しかし道綱母は最高の出世の夢を見たにもかかわらず、やはり疑っている。絶望のさなかに法師に代わりに見させたのだから、仏からの思し召しと解釈してもよいと思う。兼家との関係で大変な苦悩をした彼女にとつてはすぐに信じられない気持ち先に出ているのだ。この段階では神仏への帰依にはほど遠い。

心の奥では前述の娘だけでなく道綱の栄華への期待は十分にあるようだ。子だけでも幸せになってほしいという願いは親ならば必ずあるはずだからだ。

④天禄三(九七二)年二月、③の夢の後に侍女が見た夢である。

また、ある者の言ふ、「この殿の御門を四脚になすをこそ見しか」と言へば、「これは大臣公卿出できたまふべき夢なり。かく申せば、男君の大臣近くものしたまふを申すとぞ思すらむ。さにはあらず。きんだち御行先のことなり」とぞ言ふ。

四脚門とは大臣以上の家の門を指す。夢占では「日月の夢が最高位の象徴、不動の位置であったのに対し、門はそれらよりや、劣る。富と貴の要素のうち、富の部分が映像化され表面に押し出され易い。」とされる。ここでは作者の意思が全く書かれていない。しかし③の夢に続き、縁起のよいものとわかる。

当時道綱は十八歳で従五位下だった。初めて公卿として参議になるのはその十九年後の正暦二(九九二)年である。作者は長徳元(九九五)年に亡くなるので、この夢解きは実現した。道綱は最後に大納言まで昇る。

⑤天禄三(九七二)年二月、作者が③、④よりも少し前に見た夢はこのようなものであった。

また、みづからの一昨日の夜見たる夢、右のかたの足のうらに、大臣門といふ文字を、ふと書きつければ、驚きて引き入ると見しを問へば、「このおなじことの見ゆるなり」と言ふ。これもをこなるべきことなれば、ものぐるほしと思へど、さらぬ御族にはあらねば、わがひとりもたる人、もしおほえぬさいはひもやとぞ、心のうちに思ふ。
(傍線部筆者)

傍線部を『新編日本古典文学全集』では「さきほどの夢と同じように見えたのでございます」と訳しているが、西木忠一氏は「この子の同じことの見ゆなり」とし、道綱も同じ夢を見たという不思議な現象を表している。

③④⑤の夢の連続により、やっと作者は素直に夢への希望を持つ。そ

れでも石原氏は「幸運を期待する心と世俗をよせつけぬ孤独な暗い人生観との葛藤が、夢を含んでたえず往復する」とし、現実によってしか生きれない性格が、夢を見ても「現世の幸を希求する心と現世的通俗を受け入れられない心」を生み、現実の経験としてしか見られない限界だとされる。³⁾

確かに複雑な思いは理解できるが、絶望の境地から抜け出す第一歩にならとも解釈できる。ただし、石原氏の前者の説は事実で、この後さまざまな問題が起こり、幸福に向かうとは言いがたい。多少屈折した作者でも息子や直後に引き取る養女への期待が見られる点でこれらの夢の意義は重要であるといえる。

⑥天禄三(九七二)年八月、同年七月に道綱母が見た不吉な夢の記述がある。

いかなるにかあらむ、あやしうも心細う、涙浮かぶ日なり。たたむ月に死ぬべしといふさとしもしたれば、この月にやとも思ふ。……つごもりになりぬれば、ちぎりし経営多く過ぎぬれど、いまはなにこともおほえず、つつしめといふ日月近うなりにけることを、あはれとばかり思ひつつ経る。
(傍線部筆者)

身辺雑記的な文だからこそ、作者の深刻な様子が伝わってくる。既に死を待つだけの身のようなだが、吉川理吉氏によると道綱母は三七歳で、当時の女の重厄年だったようである。結果として取り越し苦労となる。しかし死を意識して待つほど彼女にとって現実には絶望的だったようだ。また、「お告げ」なので本当に夢を見た可能性は今までの夢以上に低いと

感じられる。夢解きが言っただけのことも知れない。

三 まとめ

⑦天禄三（九七二）年八月、⑥の記述とほぼ同時期に兼家がやって来て話す場面である。

十一日になりて、「いとおぼえぬ夢見たり。ともかうも」など、例のまことにしもあるまじきことも多かれど、（本に）……

『新編日本古典文学全集』に「脱文注記の『本に』が本文に竄入した」とあり、どのような内容かはわからない。後で作者と兼家は口論になるが、やはり読み取ることができない。⑥の傍線部では口げんかの後に遠のいた兼家を思い、落ち込んでいることもある。

⑧天延二（九七四）年一月、道綱が右馬助に就いたことを兼家は手紙で知らせてくる。その頃の院の賭弓の話がある。

そのころ、院の賭弓あべしとて、騒ぐ。頭も助もおなじかたに、出居の日々には行きあひつつ、おなじことをのみのたまへば、「いかなるにかあらむ」など語るに、二月二十日のほどに、夢に見るやう、
（本）□

この場面も⑦と同様に脱文があり、詳細はわからない。ただしこの直前に道綱は叔父にお礼まわりで挨拶に行っており、そこで養女の話をしている。それが関わりとする説⁷はある。それでもまだわかっていないのが現状である。

道綱母に関する夢は以上である。脱文もあり不明な点はまだ残っているが、前出の通り、彼女は現実的な考えをもち、なかなか迷信を受け入れようとはしない人物であることがわかる。それは兼家が遠ざかってしまったことで悲しく悔しい思いをするという煩惱で苦しみ、やがて死が近づいているというお告げを受けてからはさらに憂いを深め、あきらめている様子がうかがえる。だが、当時の日記は回想して書くため、実際よりも感情が入って大げさな記録、表現になっていることはふまえて読む必要がある。もちろんこうなる前には道綱や養女の栄華を暗示させる夢も見ているので、希望が全くなかったわけではない。最初は信じていなかったが、偶然にも三つの類似した夢が重なっていくうちに期待が出てきたのだ。だからといって苦悩がなくなっているわけではない。

永井義憲氏は鎌倉時代の名僧明恵上人などの夢の詳しい備忘録を「夢ノート」と呼び、次のように述べておられる。¹²

夢ノートを記す習慣があったこと、また夢に対する信頼、特に夢が過去の知られざる因縁を教えるものであり、未来に対する予言としても重んずべきものとされていた……（夢）ノートの性格が、あくまで個人的なものである為に、伝存したのも自筆を尊重して伝えたものか、あるいは特に異例のものであった事に注意するならば、この風習が、ただに積家のものにとどまらず、一般人にもあつたと考えてもよいのではなからうか。

以上のことから夢の記録の意義がわかる。用例は高僧の信頼できる記録

がほとんどである。それでも『蜻蛉日記』のみならず一般人の夢の記述にも同様の意図があったというのは、彼らの記録と現実に起きたこととの関係を後世の人々に伝え、比較させ、人生が何だったのかを問うためだという。したがって、夢は書き手自身が見ているという前提で読む必要がある。

ところで道綱母はこのような過程を通して自らを見つめ、一種の悟りのようなものを得たと感じる。夫についてはあきらめ、他に目を向けられる心の隙間が少しでもできたためだ。夢は宗教的・神秘的要素が多分に含まれていることに加え、作者の感情などが大いに盛り込まれているのである。それらを見ていくことが、人生や将来だけでなく、心理の変化を考える上でも重要なものの一つであるといえるかと確信している。今の段階で確実なのは夢の内容が彼女自身の願いであることだ。

注

- (1) 西郷信綱『古代人と夢』(平凡社・一九七二年)
- (2) 上野勝之「夢の諸相——平安時代を中心として——」(『日本文化環境論講座紀要』第三号・二〇〇一年三月)
- (3) 石原昭平「閉ざされた夢—蜻蛉日記」(『国文学解釈と鑑賞』四十二巻八号・一九七七年八月)
- (4) 岩瀬法雲「蜻蛉日記に見える作者の自己追究」(『園田学園女子大学論文集』第四号・一九六九年十二月)
- (5) 金子真理子「女流日記文学に見る夢」(『宇部短期大学学術報告』十七号・一九八一年二月)
- (6) 後藤祥子「右大将道綱母の愛と性」(『国文学解釈と鑑賞』第六十九巻十二号・二〇〇四年十二月)
- (7) 池田利夫「夢から見た蜻蛉日記」(『レポート笠間』十五号・一九七七年六月)

月)

- (8) 深沢徹「蜻蛉日記」下巻の変容——夢の〈技術〉とその〈解釈〉をめぐる——(『日本文学』三十四巻九号・一九八五年九月)
- (9) 江口孝夫「夢と日本古典文学」(笠間書院・一九七四年)
- (10) 西木忠一「蜻蛉日記の研究」(和泉書院・一九九〇年)
- (11) 吉川理吉「藤原長能とかげろふの日記の記者ら」(『国語国文』第十二巻第六号・一九四二年六月)。これをあげるのは柿本奨「蜻蛉日記全注釈」、村井順「かげろふ日記全評解」である。
- (12) 永井義憲「更級日記と夢ノート」(『日本文学研究資料叢書 平安朝日記』二・一九五八年五月)

引用文献

- 菊地靖彦・木村正中・伊牟田経久「新編日本古典文学全集十三 土佐日記・蜻蛉日記」(小学館・一九九五年)
- 阿部秋生他「新編日本古典文学全集二三 源氏物語四」(小学館・一九九六年)

参考文献

- 岡一男「道綱母」(青梧堂・一九四三年)
- 柿本奨「蜻蛉日記全注釈」(角川書店・一九六六年)
- 大西善明「蜻蛉日記新注釈」(明治書院・一九七一年)
- 村井順「かげろふ日記全評解」(有精堂出版・一九七七年)
- 小松茂美他「日本絵巻大成一八 石山寺縁起」(中央公論社・一九七八年)
- 角川書店編集部編「日本繪巻物全集第二十二巻 石山寺縁起繪」(角川書店・一九六六年)
- 『広説佛教語大辞典』(東京書籍・二〇〇一年)
- 鳥居和子「日本文学古典に於ける夢」(『立教大学日本文学』三十号・一九七三年六月)
- 森田兼吉「夢よりもはかなき女流日記文学と夢」(『文学における夢』・一九七八年六月)

年四月)

今井卓爾 『蜻蛉日記』の夢と信仰 (『女流日記文学講座 一』・一九九〇年)

石原昭平 『平安女流日記と仏教——『蜻蛉日記』『紫日記』『更級日記』と浄土教—— (『仏教文学の構想』・一九九六年七月)

漢字文献情報処理研究会 『電腦国文学 インターネットで広がる古典の世界』
(好文出版・二〇〇〇年)